『九州産業大学国際文化部紀要』，第85号，1-26，2025
KYUSHU SANGYO UNIVERSITY, *Faculty of International Studies of Culture* No.85, 1-26, 2025

【論文】

九州産業大学図書館蔵『奈良絵本 竹とり翁物語』―解題と翻刻―（上）

宮崎裕子　曽根誠一

一　解題

九州産業大学図書館蔵『奈良絵本　竹とり翁物語』（以下、九産大本と略称する）の［書誌］と［本文］について、論述することにする。

先ず、九産大本の［書誌］について記すと、次の通りである。

横本（中型）の写本、二帖。大きさは一八・五×二二・五糎で、列帖装。寛永頃の書写で、上巻十一図、下巻八図の計十九図の図絵を貼付する（下巻第24丁表の白紙は、第23丁裏の本文が三行書写（非散らし書き）された後、十二行分空白なので、図絵が剝離されたもの歟。とすれば、下巻は本来九図で、計二十図であったことになる）。表紙は紺色の地で、上下部に銀切箔を散らし、中央部に金泥で草花（下巻は葡萄）を描くその上下に、銀泥で棚引く霞を描く。表表紙の中央に、朱色の地に金泥で雲を描く題簽を貼り、外題は「竹とり翁物語　上（下）」と墨書する。内題は「竹取翁物語（下）」。見返しは銀箔で、蔓草と丸紋の浮き彫り文様。斐紙の本文料紙に金泥で草花、銀泥で流水や波、藤の花房や枝垂桜の花弁等を描くとともに、一部緑で彩色する。遊紙は、巻首に上下巻ともなく、巻尾は上巻に二丁あるも、下巻にはない。墨付きは上巻三〇丁、下巻二六丁。本文は一面十五行書き。図絵の直前の丁の書写本文は、第2・13図の二図のみ散らし書きとなっており、直前本文に空白行のない第8・9・12・15・19図の五図を除く、図絵空白丁を含めた十三図の直前は、空白行はあるものの、散らし書きにはなっていない。このことは、直前本文が散らし書きで書写されることが一般化する以前の、過渡期の書写形態を留めている証左のように思われる。

次に、九産大本の［本文］は、如何なる伝本を親本にして書写されたのか、という問題について、検討してみたい。

親本の問題については、既に、次のような指摘がある。

本文を中田剛直著『竹取物語の研究（校異篇 解説篇）』と比較するに、底本である「古活字版十行甲本」に近似し、異同を見ると「同十一行乙本」により近いようであるが、他の異同も処々に見られ精査が俟たれる。[1]（52頁）

この指摘を踏まえて、依拠した親本は、古活字10行甲本と同11行乙本の何れであるのかを、論ずることにし、10行甲本は国会図書館本[2]、11行乙本は天理大学附属天理図書館本（九一三・三一／イ七、新宮春三氏・岡田真之氏旧蔵）に拠ることにする。

先ず、九産大本の本文と、古活字本の嚆矢と位置付けられている10行甲本の本文が一致し、10行甲本を新たに組み直した再版本と考えられている11行乙本[3]と相違する事例は、五例であるのに対して、九産大本と11行乙本の本文が一致し、10行甲本と相違する事例は、三一例あり、数量的にいえば、九産大本が依拠した親本は、11行乙本であるという見通しが立ちそうである。

そこで、九産大本と11行乙本が一致し、10行甲本と相違する三一例を掲げると、次の通りである（上段本文は九産大本を掲げて、異同箇所に傍線を付し、括弧内に九産大本／11行乙本の丁数・表裏の別・行数を示し、11行乙本の表記が異なる場合はそれを記した。下段は、上段の傍線部と対応する10行甲本本文と、丁数・表裏の別・行数を示した）。

尚、本文の引用に際して、異体字は、通行の字体に改めた（以下同じ）。

①うつくしき事かきりもなし（上1裏3／11乙1裏1）――×（1裏3）

②見つけてのちにたけをとるに（上1裏6／11乙1裏3）――×（1裏5）

③よことに×かねのあるたけを（上1裏7／11乙1裏4）――×（1裏6）

④翁の申さん事は聞給ひてんや（上6裏11／11乙3裏10）――×（4裏5）

⑤かくや姫のいはくよくもあらぬかたちを（上7表15／11乙4裏1）――×（5表10）

⑥日くるゝほとれいの人あつまりぬ（上8表6／11乙5表4）――×（6表6）

⑦かくや姫なにかかたからんと（上10表3／11乙6表5）――×（7裏2）

⑧光をたにもやとさまし×（上11表3／11乙7表5）――を（8裏5）

⑨をくら×山にてなにもとめけん（上11表4／11乙7表6）――の（8裏6）

⑩たくみらを入給ひつゝ（上12裏5／11乙8表5）――×（9裏9）

⑪おはしたりといへはおきなあひ奉る（上13表10／11乙8裏7）――×××（10裏5）

⑫ある時にはいはんかたなくむくつけゝなるもの（上14裏14／11乙10表11）――×（12裏7）

⑬年ころ見え給はさりける也××（上19表5／11乙14表4）――けり（17表10）

⑭これをなん玉さかなるとはいひはしめける（上19表5／11乙14表4）――×（17裏1）

⑮小野のふさもりまうてきて（上20裏6／11乙14裏7）――×（18表8）

⑯馬をもちてはしらせむかへさせ給ふ（上20裏9／11乙14裏9）――ん（18表10）

⑰かくや姫の彼衣を見ていはく（上22表3／11乙16表3）――かは（20表3）

⑱大臣こたへて云此かはゝもろこしにも（上22裏9／11乙16裏7）――いはく（20裏10）

⑲いはんや龍のくひの玉はいかゝとらん（上24表9／11乙17裏8）――に（22表6）

⑳あるかきり取出してそへてつかはす（上24裏11／11乙18表9）――出（23表1）

㉑舟人こたへて云あやしき事かな（上26表10／11乙19表8）――いはく（24表7）

㉒なにの用にかあらんと申（下1表5／11乙22裏3）――し（28裏3）

㉓屋のむねにつゝのあなことに（下1表14／11乙22裏9）――く（29表1）

㉔と書はつるよりたえ入給ひぬ（下5裏9／11乙26表11）――××（33裏6）

㉕むなしくなして×こそあれ（下10表7／11乙28裏9）――し（36裏8）

㉖ふとみゆきして××××御覧せられなん（下10裏12／11乙29表11）――御覧せん（37裏4）

㉗なを出おはしまさんとて御こしを（下11表12／11乙29裏10）――いて（38表6）

㉘御心にかゝりてたゝひとりすまし給ふ（下13表3／11乙31表2）――み（39裏4）

㉙なたねのおほきさにおはせしを（下15表5／11乙33表2）――を（42表7）

㉚彼国の人／／はみなあきなんとす（下18表2／11乙35表4「々」）――こ（45表3）

㉛えたゝかひとめす成ぬる事こま／／とそうす（下24裏10／11乙39裏7）――×（51表3）

右の異同で、先ず注意されるのは、10行甲本が組版時の錯誤によって脱字した文字を補った事例であり、⑦「かくや姫」と⑩「たくみ」の二例がある。

これに準ずる事例として、10行甲本の表記を改めて適切な表現や理解し易い表現にした五例があり、⑯動詞「むかへ」（迎へ）は、「ん」という撥音表記が係助詞「なむ」や、助動詞「む」「らむ」「けむ」に散見されるものの、自立語には見られないため、「はしらせん。かへさせ」と誤読されることを回避すべく、表記を改めたのであろ

う。⑲格助詞「の」は、「くひにたま」の表現が不自然であるため、㉒代名詞「なに」（何）も、「なしの用」の表現が不自然であるために、改めたのであろう。㉓名詞「つゝ」（筒）は、燕が巣を作る場所として、「つくのあな」の「つく」（柱）という語に、馴染みがなかったことと、直後の「あな」との関連及び、「く」と踊り字「ゝ」の字形の類似が相俟って、「つゝ」と理解したのであろうが、意改本文になっている。㉙格助詞「おほきさにおはせし」は、強意の間投助詞「を」を、平易な表現に改めている。

また、10行甲本に文字を補って異なる意味の語に変更した事例に、贋の語源譚である⑭形容動詞「玉さかなる」（「偶なる」と「魂悪なる」）があり、庫持皇子が恥じて独り深山に入って出家し、長年姿を現さなかった直前の叙述との関連を勘案して、「玉さか×る」（「魂離る」と「魂避る」）を改めたのであろう。

以上の内で有益な事例は、㉓㉙を除く六例に留まるのだが、最も多い事例は、10行甲本に助詞や名詞を補って、理解し易い表現にしたり、強調表現にした一一例である。

名詞を補った三例は、⑥「人」と⑪「おきな」が主語を補い、㉛「事」は目的語を補って、文脈の理解を容易にしている。助詞を補った八例が、文章の理解を平易にしていることは、①係助詞「かきりもなし」、②格助詞「たけをとる」、③格助詞「×かねのある」、④係助詞「事は聞き給ひ」、⑤格助詞「姫のいはく」、⑫格助詞「ある時には」、⑮格助詞「小野のふさもり」、㉔格助詞「書はつるよりたえ入」の事例に明らかであろう。

その一方で、10行甲本の語を誤読や思い込みのために、別の語に変更した事例が七例あり、⑰「彼衣」（代名詞＋格助詞）は、「かは（皮）きぬ」を思い込みで錯誤し、⑱㉑動詞「云」（いふ）も、「いはく」を思い込みで錯誤し、⑳動詞「出し」は、「出」（いで）を「いだし」と判読した事例である。㉗動詞「出」（いで）は、「いて」（率て）の意味を誤読して、文脈にそぐわない漢字を当て、㉘動詞「すまし」では文意が通らず、「すみ（住）し」を思い込みで誤り、㉚名詞「人／は」は、「人こは」を踊り字と誤読した事例である。

また、10行甲本の助詞や助動詞を削除した事例が四例あり、⑧「やとさまし×」は、和歌の字余りを整序すべく間投助詞「を」を、⑨「をくら×山にて」も、字余りを考慮して格助詞「の」を削除した事例である。⑬「さりける也××」は、近接して重複する助動詞「けり」を削除し、㉕「なして×こそ」も、副助詞「し」と係助詞「こそ」による強意の重複を回避すべく、削除した事例である。何れも平易な表現になっているものの、元来の本文が有する個性的な表現が喪失される危険性を孕んでいることに、留意する必要があろう。

この他、㉖「××××」は、直後の本文「御覧せられなん」に目移りして、「御覧せん」を脱文した事例である。

以上のように、九産大本は11行乙本と三一例が一致し、10行甲本とは相違しているのだが、それとは逆に、九産大本と10行甲本が一致し、11行乙本と相違する事例が五例あるので、それを検討するこ

とを通して、九産大本が11行乙本を親本としていると考えて矛盾しないことを、論ずることにしたい。

尚、上段本文は九産大本を掲げて、異同箇所に傍線を付し、括弧内に九産大本／10行甲本の丁数・表裏の別・行数を示し、10行甲本の表記が異なる場合はそれを記した。下段は、上段の傍線部と対応する11行乙本本文と、丁数・表裏の別・行数を示した。

①いとおさなければ籠にいれてやしなふ（上1裏3／10甲1裏3「こ」）――手箱（1裏2）

②石つくりの御子は心のしたくある人にて（上10表14／10甲7裏10）――子御（6裏1）

③いひかゝつらいてかへりぬ（上11表11／10甲9表2）――く（7裏1）

④いふやう誠×ほうらいの木かとこそ思ひつれ（上18表2／10甲16表3）――の（13表2）

⑤まかりありくに、またかゝるわひしきめをみす（上26裏14／10甲25表3）――又（19裏11）

右の11行乙本の異同の内、②「子御」は、組版時に文字を逆転させた錯誤である。③「かく（閑久）」は、二格の木活字であるが、「いひかゝづらいて」という文脈から判断して、字形の類似による誤読に基づく組版上の錯誤であり、⑤接続詞「又」も、文脈から判断して副詞「まだ」であって、「まだかゝるわびしきめをみず」という10行甲本本文を、誤読して漢字を当てた事例であり、九産大本はそれに気付いて、漢字を平仮名に開いたのであろう。

このように九産大本の書写者は、異同箇所の過半の三例で、11行乙本の錯誤を継承していないことから判断して、11行乙本の本文を無批判に転写していた訳ではないようなのである。

11行乙本の④「誠の」は、第24丁裏3行目に「誠つはくらめ巣つくれり」とあり、この箇所を九産大本は「まこと」、10行甲本も「誠」と同一であって、違和感のある表現であるために、「の」を削除したのであろう。

これと同様の事例として、11行乙本の①「手箱」があるように思われる。「手箱」と「籠」は、大きく相違しており、単純な誤読・誤写では処理できない。これは⑤と同様に、九産大本の書写者が「竹をとりつゝよろづの事につかひけり」「子（「籠」との掛詞）になり給ふべき人」（天理図書館蔵11行乙本は、第1丁表の本文を欠脱し、正保三年刊整版本で補写しているので、11行乙本を親本とする名古屋大学森本文庫本本文を引用する）という文脈を勘案して、本文を改めたのであろう。

以上のように、九産大本の本文が11行乙本と相違しながら、10行甲本と一致する五例は、九産大本の書写者が11行乙本の本文に疑問を抱き、その見識に基づいて本文を改めた事例と考えられるのであり、10行甲本を親本として書写した結果として、一致したのではないと思われるのである。すなわち、九産大本が親本とした伝本は、古活字11行乙本であったと判断されるのである。

次に、九産大本が親本としている11行乙本に対する独自異文について、検討してみたい。

独自異文の事例は、〈誤写〉一六例、〈脱字〉八例、〈脱文〉一例、〈増補〉四例の合計二九例となっている。ついては、順次検討することにし、先ず〈誤写〉の事例を掲げると、次の通りである（上段本文文は九産大本、傍線部と対応する下段の本文は11行乙本／10行甲本で、それぞれ丁数・表裏の別・行数を示した。以下同じ）。

①はらたゝしき事もやみぬみけり（上2裏14）――なくさ（2表2／10甲2表7）

②此人／／あるひは竹とりをよひ出て（上5表10）――時（3表11／10甲4表3）

③かくや姫返事もせす成ぬ（上11表10）――し（7表11／10甲9表1）

④むかえの人おほく参りたり（上12裏15）――に（8表11／10甲10表7）

⑤風に付てしらぬ国にふきよせゝれて鬼のやうなる（上14裏9）――ら（10表8／10甲12裏3）

⑥かくや姫のえらし給ふへき也けり（上17裏12）――う（12裏9／10甲15裏8）

⑦翁さはかりかさらひつるかさすかに（上18表12）――た（13表10／10甲16裏2）

⑧かはきぬをこれはこんしやうの色也（上21裏2）――見（15裏3／10甲19表9「み」）

⑨をの／／仰うけ給てまかりぬ（上24裏15）――承（18表11／10甲23表4）

⑩すゝろなるしにをすへかめるとと（上27表5）――かな（20表5／10甲25表9）

⑪玉をえとらさりしかはなん殿へもえまいらさりし（上29表13）――南（21裏3／10甲27表7）

⑫いそのかみのもろたかの家につかはるゝ（下1表2）――ま（22裏1／10甲28裏1）

⑬こやす貝をとらんようなりとの給ふ（下1表8）――れ（22裏4／10甲28裏5）

⑭さらに見ゆへきもあらす、むめる子のやうに（下7表9）――く（27表6／10甲34裏6）

⑮とありともかくあり共みいのちのあやうさこそ（下10表10）――、（28裏11／10甲37表1）

⑯百官人／／ありしいかめしうつかうまつる（下12表11）――る（30表7／10甲38裏6）

右の事例の内で、11行乙本の本文を基準とすれば誤写なのだが、文意からすると正当な表記に改めたものとして、⑪「なん殿」一例がある。文末が過去の助動詞「き」の連体形で終止しているので、係助詞「なむ」が正しく、龍の頸の玉を入手できなかった従者達は、大伴御行邸に参上し得なかったというのであって、邸内の建物「南

殿」に限定されていた訳ではないのである。

残る一五例は、文意の通る語への置換九例と、誤読による文意不通の六例に大別される。

文意の通る語への置換は、思い込みによる誤写によって生じているのだが、違和感の少ない事例として七例があり、②「あるひ」は、「或時」を誤写し、③「返事」は、「返事」と誤写した後で錯誤に気付き、親本の表記「し」を右に傍記したものである。④「むかへの人」は、「むかへに人……まいり」の文脈に気付かずに誤写し、⑨「うけ給て」（うけたまはつて）は、「承て」（うけたまはりて）を、促音便で表記したものである。⑬「よう」（用）は、「とらんれう」の「れう」（料）が馴染みの少ない語であったために、平易な語に置換し、⑭「見ゆへきも」は、「見ゆへきも」と誤写した後で錯誤に気付き、親本の表記「く」を右に傍記したものである。⑮「かくあり」は、「かゝり」の踊り字「ゝ」を字形の類似する「く」と誤読したために、「くあ」と表記したものである。

また、文意の通る語ではあるものの、違和感の残る事例として二例があり、⑧「これは」は、「見れは」の誤写だが、「見」と「こ（己）」に字形の類似性はなく、⑫「もろたか」も、「まろたか」の誤写だが、「ま（末）」と「も（毛）」に類似性はなく、思い込みによる誤写であろう。

次に、文意不通の六例を検討すると、①「やみぬみけり」は、「なくさみけり」を直前の「はらたゝしき事も」との関連で「やみぬ」と誤写した上で、続きを文意不通のままに書写したものである。⑤「ふきよせゝれて」は、「ら（良）」を字形の類似から踊り字の「ゝ」に誤写し、⑥「えらし」は、「えうし」の「う（宇）」を字形の類似から、「ら（良）」に誤写したものである。⑦「かさらひつる」は、「かたらひ」の「た（多）」を、「さ（左）」に誤写し、⑩「すへかめると」は、「すへかめると」と誤写した後で錯誤に気付き、親本の終助詞「かな」を右に傍記したものである。⑯「ありし」は、「あるし」の「る（留）」を字形の類似から、「り（利）」に誤写したものである。

以上の事例の検討で留意されるのは、③「返事」⑩「と」⑭「へき」の三箇所に、親本である11行乙本本文が傍記されていることである。奈良絵本・絵巻は、嫁入り道具の一として嫁ぎ先に持参する晴儀のものであるためであろう、誤写をミセケチにして修正したり、脱文を行間に補記する事例は、確認されないのだが、一伝本中に傍記が三例見られるのは、極めて稀なことであり、九産大本が丁寧に書写された伝本であることの証左と考えられるのである。(4)

とはいえ、如何なる丁寧さを以てしても、書写時に錯誤が生ずることは回避し難く、〈脱字〉八例を掲げると、次の通りである。

①よことに×かねのあるたけをみつくる事（上1裏7）――こ（1裏4／10甲1裏6）

②かくや姫××にもてきて見せけれは（上10裏10）――の家（6裏9／10甲8表9）

③あつまりて××おろさんとてつなをひき過して（下3裏9）

――とく（25表3／10甲32表1）

④人にかみ×もたせてくるしき心ちに（下5表15）――を（26表7／10甲33裏2）

⑤月を見てはいみし×くなき給（下13裏2）――し（31裏1／10甲40表6）

⑥物おほすけしき×有そといへは（下14表6）――は（32表4／10甲41表3）

⑦此国に生ぬ。る。とならはなけかせ奉らぬほと（下21表6）――る（38表2／10甲48裏9）

⑧心つよくうけ給はらす成にし×なめけなる物に（下23表5）――事（39表2／10甲50表5）

右の事例の①は、「こかね」の「こ」を脱字し、②は「姫の家に」の「の家」を脱字し、③は「とくおろさん」の「とく」を脱字し、④は「かみを」の格助詞「を」を脱字したものである。⑤は「いみしく」の重複する「し」を脱字しているが、形容詞「いみじ」はク活用なので、語法的な錯誤を修正した正当な処置になっている。⑥は「けしきは」の係助詞「は」を脱字し、⑦は「生ぬると」を、「ぬと」と誤写した後で「る」を脱字したことに気付いて、語間に「。」を記し、その右に「る」を傍記したものである。⑧は「なりにし事」の「事」を脱字したものである。

また、〈脱文〉は一例確認され、11行乙本の当該本文を引用すると、次の通りである。

ところのものきこしめしたれは御心ちあしからんものそとてもてよりたれは（38表10～11／10甲49表8～10）

これは、九産大本の下巻第21丁裏2行目「くすり奉れきたなき」の直後に書写されるべき本文であり、この後13行に亘って本文は書写されず、空白になっている。続く第22丁表には、第18図「かぐや姫を迎えに来た飛天は、右手に薬の壷、左手に手紙を持ち、簀子に立つ姫と向き合う」が貼付されているのだが、直前の本文が「きたなき」と、文の途中で不自然に書き止されていることを考えると、何等かの事情が生じて、書き忘れた錯誤である可能性が高そうに思われる。

最後に、11行乙本と10行甲本に存在しない文字を〈増補〉した四例を掲げると、次の通りである。

①そかくひの玉をとれるとや聞と（上26表9）――×（19表8／10甲24表6）

②くらつまろかく申をいといたくよろこひ給ての給（下3表3）――×（24表10／10甲31表3）

③こしもかゝまり目もたゝれにけり（下16表1）――×（33裏8／10甲43表8）

④かはかりしてまもる所にかはかり一たにあらは（下17裏9）――×（34裏10／10甲44裏6）

右の内、①は「玉を」と格助詞「を」を補い、②は「よろこひ給ての給」と、石上麻呂足の動作に対して尊敬の補助動詞「給」を補っ

て、文の理解を容易にしている。④は「かは×り」では文意が通らないので、「かはかり」と補って理解を図っているのだが、意改本文になっている。③「かゝまり」は衍字で、「ま」を重複させた錯誤の事例である。

以上、九産大本の11行乙本に対する独自異文二九例を検討したのだが、〈誤写〉⑪「なん殿へも」と〈脱字〉⑤「いみし×く」の二例は、正当な本文となっているため、これを除く二七例という誤写の事例数は、『竹取物語』の奈良絵本・絵巻の本文としては、丁寧な書写が行われたことを証するものであるといえるように思われる。

注

（1）『和の史　思文閣古書資料目録』第238号（平成二六年七月）

（2）版本文庫『竹取翁物語』（国書刊行会　昭和四九年一一月）の影印は、表紙は片桐洋一氏本（立教大学池袋図書館現蔵）、本文は国会図書館本（横山重氏旧蔵）であり、これに拠った。

（3）中田剛直氏『竹取物語の研究　校異篇　解釈篇』（塙書房　昭和四〇年六月）は、「十行甲本から出たと思はれるものに古活字十一行乙本が存する。活字もほぼ同類で、しかも刊記が一致する。ただし現存唯一つの十一行乙本は肝腎の巻末が落丁により刊記の有無が不明だが、同本を写した写本が三本（大島雅太郎氏旧蔵本、戸川浜男氏旧蔵一本、小鳥井寛孝氏蔵本＝稿者注）あり、それにより十行甲本と同様の刊記が存したことは明確である。しかしながら、本文は全く十行甲本とは同じいものではない。即ち十一行乙本は十四項の独自異文を有する（ただし現存十一行乙本は巻頭脱葉により正確には不明だが、同本を写したとみられる他本文により二項が推定される）」（216頁）。「おそらく十行甲本を再刊するに当り、二類系により多少本文を任意訂正して世に出したものであらう」（217頁）と指摘している。

名古屋大学森本文庫蔵奈良絵本（江戸後期の転写本）の本文は、巻末に10行甲本と同じ「竹取翁物語秘本申請興行之者也」という識語があり、その他の本文的特徴から、11行乙本を親本として書写した伝本であると判断される。

（4）誤写した文字に重ね書きして訂正した事例は、次のように六例確認される（修正後の文字に傍線部を付し、その下の（　）内に修正前の文字を記す）。

上巻第10丁表4行目「翁とまれかくま（あ）れ申さん」

第12丁表9行目「いとしのひてとの給はせて人（と）もあまたゐて」

第23丁表13行目「かくや姫あひ給はすといひ（ふ）けれは」

第24丁表15行目「此国の海山よ（に）りたつはをりのほる物なり」

第29丁表6行目「すもゝを二つけたるやうな（に）り」

下巻第4丁裏5行目「こしなんうこかれぬさ（と）れとこやす貝を」

これを見ると、重ね書き可能な誤写は、それで処理し、不可能な場合に、傍記の形式を取ったのだと理解されよう。それでも、誤写をそのまま放置しなかった誠実さは、評価されるべきであろう。

二　翻刻

凡例

1. 九州産業大学図書館蔵『奈良絵本 竹とり翁物語』上巻の翻刻を掲載する。下巻の翻刻は次号以降に掲載予定である。
2. 翻刻にあたっては、底本の体裁をできる限り忠実に再現し、旧漢字・異体字はそのまま翻字して、各面の配字配行もそのままにした。

3．丁数は各丁の表裏の最後に【 】で示し、表裏は「オ・ウ」と表示した。

4．書き入れ等については、次のように表記した。

①重ね書きによって文字を修正している箇所については、修正後の文字を記し、その下の（ ）内に修正前の文字を示した。

②補入を示す記号「。」は本文中に記載し、補われた語句を補入記号の右傍に記した。

5．図絵については通し番号を付し、描かれている事柄を簡単に説明した。

本文

竹とり翁物語 上（表表紙題簽）

竹取翁物語

いまはむかしたけとりのおきな
といふもののありけり野山にまし
りて竹をとりつゝよろつの
叉につかひけり名をはさるき
の宮つことなんいひけるその
たけの中にもとひかる竹なん
一すち有けりあやしかりて
よりて見るにつゝの中ひかりた
りそれをみれは三寸はかり
なる人いとうつくしうしてゐた
りおきないふやうわれ朝こと夕
ことに見る竹の中におはする
にてしりぬ子に成給ふへき人
なめりとて手にうちいれて家【1オ】
へもちきてめの女にあつけて
やしなはすうつくしき叉かき
りもなしいとおさなけれは籠
にいれてやしなふ竹とりの
翁たけをとるに此子を見つ
けてのちにたけをとるにふ
しをへたてゝよことにかねの
あるたけをみつくる事かさ
なりぬ【1ウ】

図絵1　かぐや姫の養育【2オ】

かくておきなやう〳〵ゆたかに成
ゆく此ちこやしなふほとにす
く〳〵とおほきに成まさる

三月はかりになるほとによきほ
となる人に成ぬれはかみあけな
とさうしてかみあけさせ裳き
すちやうのうちよりもいたさす
いつきやしなふこのちこのかたち
のけさうなる支世になく屋の
うちはくらき所なくひかりみちた
りおきな心ちあしくくるし
き時も此子を見れはくるし
き事もやみぬはらたゝしき
事もやみぬみけりおきな竹
をとる支ひさしく成ぬいき【2ウ】
おひまうの物に成にけり此子
いとおほきに成ぬれは名をみむ
ろといむへのあきたをよひてつ
けさす

あきた
なよ竹の
かくや
ひめと
つけつ【3オ】

図絵2　三室戸斎部秋田、かぐや姫と対面【3ウ】

このほと三日うちあけあそふ
萬のあそひをそしけるおとこ
はうけきらはすよひほとへて
いとかしこくあそふ世界のおのこ
あてなるもいやしきもいかて此
かくや姫をえてしかな見てし
かなと音にきゝめてゝまとふその
あたりのかきにも家の戸にも
をる人たにたはやすく見るま
しき物をよるはやすきいもね
すやみのよにいてゝもあなをくし
りかひま見まとひあへりさる時
よりなんよはいとはいひける人
のものともせぬ所にまとひありけ
共何のしるしあるへくも見えす【4オ】
家の人共に物をたにいはんとて
いひかくれ共ことゝもせすあたり
をはなれぬ君たち夜をあかし
日をくらすおほかりをろかなる
人はようなきありきはよしなか

りけりとてこす成にけりその
中になをいひけるは色このみ
といはるゝかきり五人思ひやむ
時なくよるひる来りけりその
名とも石作りの御子くらもち
のみこ左大臣あへのみむらし
大納言大伴のみゆき中納言
いそのかみのもろたり此人／／
成けり世の中におほかる人をた
にすこしもかたちよしと聞て【4ウ】
は見まほしうする人共成けれ
はかくや姫を見まほしうて物も
くはす思ひつゝ彼家にゆきてたゝ
すみありきけれとかひあるへくも
あらす文をかきてやれ共返事
もせすわひ哥なとかきてをこ
すれ共かひなしと思へと霜月
しはすのふりこほりみな月の
てりはたゝくにもさはらすきた
り此人／／あるひは竹とりをよ
ひ出てむすめをわれにたへとふし
おかみ手をすりの給へとをのかな
さぬ子なれは心にもしたかはすなん
あるといひて月日すくす【5オ】

図絵3　かぐや姫に対する求婚者殺到【5ウ・6オ】

かゝれは此人／／家に帰りてもの
を思ひいのりをし願をたつ
思ひやむへくもあらすさり共つゐ
におとこあはせさらんやはと思ひ
てたのみをかけたりあなかち
に心さしを見えありく是を
見つけておきなかくや姫に
いふやう我子の佛へんけの人
と申なからこゝらおほきさまて
やしなひ奉る心さしおろかなら
す翁の申さん事は聞給ひてん
やといへはかくや姫なに叉をかの
給はんことはうけ給はらさらんへ
んけのものにて侍りけん身共
しらすおやとこそ思ひ奉れと【6ウ】
いふおきなうれしくもの給ふ物
かなといふ翁年七十にあまりぬ

けふ共あす共しらす此世の人は
おとこは女にあふことをす女は男に
あふことをすその〻ちなん門ひろ
くも成侍るいかてかさる叉なく
てはおはせんかくや姫のいはくなん
てうさる叉かし侍らんといへは
へんけの人と云共女の身もち
給へり翁のあらんかきりはかう
てもいますかりなんかし此人〳〵
のとし月をへてかうのみいまし
つ〻の給ふ叉を思ひさためて
ひとり〳〵にあひ奉り給ねといへ
はかくや姫のいはくよくもあら【7オ】
ぬかたちをふかき心もしらてあた
心つきなは後くやしき事も
あるへきをと思ふはかりなり世
のかしこき人なりともふかき心
さしをしらてはあひかたしと
なん思ふといふおきないはく
思ひのことくもの給ふかなそも
〳〵いかやうなる心さしあらん
人にかあはむとおほすかはかり
心さしをろかならぬ人〳〵にこそ
あめれかくや姫のいはくなに
はかりのふかきをか見んといはん
いさ〻かの叉なり人の心さしひと
しかんなりいかてか中におとり
まさりはしらむ五人の中にゆか【7ウ】
しき物を見せ給へらんに御心
さしまさりたりとてつかうま
つらんとそのおはすらん人〳〵
に申給へといふよき叉なり
とうけつ日くる〻ほとれいの
人あつまりぬあるひはふえを
ふき或はうたをうたい或は
しやうかをし或はうそをふ
きあふきをならしなとするに【8オ】

図絵4　色好み五人、翁邸に集合【8ウ】

翁いて〻いはくかたしけなく
きたなけなる所に年月を
へて物し給ふ叉きはまり
たるかしこまりと申翁のいの

ちけふあすともしらぬをかくの
給ふ君たちにもよく思ひさた
めてつかうまつれと申もこと
はりなりいつれもおとりまさ
りおはしまさねは御心さし
のほとは見ゆへしつかうまつら
ん支はそれになんさたむへ
きといへはこれよき支なり人
のうらみもあるましといふ五人
の人／＼も能支なりといへは翁
いりていふかくや姫石つくりの【9オ】
御子には佛の御石のはちといふ
物ありそれをとりて給へと云
くらもちの御子には東の海に
ほうらいといふ山あるなりそれ
にしろかねをねとしこかねを
くきとし白き玉をみとして
たてる木ありそれ一えたおり
て給はらんと云いまひとりには
もろこしにある火ねすみの
かはきぬをたまへ大伴の大
納言には龍のくひに五色にひ

かるたまありそれを取て給へ
いそのかみの中納言にはつはくらめ
のもたるこやすの貝とりて給へ
といふおきなかたき支にこそ【9ウ】
あなれ此国にある物にもあら
すかくかたき事をはいかに申さん
といふかくや姫なにかかたからん
といへは翁とまれかくま（あ）れ申
さんとて出てかくなん聞ゆる
やうに見給へといへは御子たち上
達部聞ておいらかにあたり
よりたになありきそとやはの給
はぬといひてうんしてみなかへ
りぬなを此女見ては世にあるま
しき心ちのしけれは天竺に
ある物ももてこぬものかはとお
もひめくらして石つくりの
御子は心のしたくある人にて
てんちくに二となきはちを百【10オ】
千萬里の程ゆきたり共いかて
かとるへきと思ひてかくや姫の
もとにはけふなんてんちくへ石の

はちとりにまかるときかせて
三年はかり大和の国とをちの
こほりにある山寺にひんするの
まへなるはちのひたくろにす
みつきたるをとりてにしきの
ふくろに入てつくり花のえた
につけてかくや姫にもてきて
見せけれはかくや姫あやしかり
て見れははちの中に文あり
ひろけてみれは
　うみ山のみちに心をつくしはて
　ないしのはちの涙なかれき【10ウ】
かくや姫ひかりやあると見るにほた
るはかりのひかりたになし
　をく露の光をたにもやとさまし
　をくら山にてなにもとめけん
とて返しいたすはちを門に
すてゝ此うたのかへしをす
　しら山にあへは光のうするかと
　はちをすてゝもたのまるゝ哉
とよみていれたりかくや姫
返事(し)もせす成ぬ耳にもきゝ
入さりけれはいひかゝつらいてかへ
りぬかのはちをすてゝ又いひけ
るよりそおもなき支をはは
ちをすつるとは云ける【11オ】

図絵5　石作皇子、仏の石鉢を提出【11ウ】

くらもちの御子は心たはかり有
人にておほやけにはつくしの国
にゆあみにまからんとていとま
申てかくや姫の家には玉の枝
とりになんまかるといはせてくた
り給ふにつかうまつるへき人々
みな難波まて御をくりしけ
る御子いとしのひてとの給は
せて人（と）もあまたゐておはし
まさすちかうつかうまつるかきり
して出給御をくりの人〳〵
見奉りをくりてかへりぬおはし
ましぬと人には見え給ひて三日
はかりありてこきかへり給ひぬ
かねてこと皆おほせたりけれはその【12オ】

時ひとつのたから也けるかちたく
み六人を召とりてたはやすく
人よりくましき家をつくり
てかまとを三へにしこめてたく
みらを入給ひつゝ御子もおなし
所に籠り給てしらせ給ひたる
かきり十六そをかみにくとを
あけて玉の枝をつくり給ふ
かくや姫の給ふやうにたかはす
つくり出ついとかしこくたはか
りて難波にみそかにもて出
ぬ舟にのりて帰りきにけりと
とのにつけやりていといたくく
るしかりたるさましてゐ給へり
むかえの人おほく参りたり玉の【12ウ】
えたをはなかひつに入て物おほい
てもちてまいるいつかきゝけん
くらもちの御子はうとんけの
花もちてのほり給へりとの、
しりけり是をかくや姫きゝて
我は此みこにまけぬへしとむ
ねつふれて思ひけりかゝる程に
門をたゝきてくらもちの御子
おはしたりとつく旅の御姿なか
らおはしたりといへはおきなあひ
奉る御子の給はく命をすて、
かの玉のえたもちて来るとて
かくや姫に見せ奉り給へといへは
おきなもちて入たり此玉の枝
に文そつけたりける【13オ】
いたつらに身はなしつ共玉の枝を
たをしてさらにかへらさらまし
これをもあはれ共みてをるに竹
取の翁はしり入ていはく此御
子に申給しほうらいの玉の枝を
ひとつの所あやまたすもておは
しませり何をもちてとかく申
へきたひの御すかたなからわか御
家へもより給はすしておはし
ましたりはや此御子にあひ
つかうまつり給へといふに物も
いわすつらつえをつきていみ
しくなけかしけに思ひたり此
御子いまさへなにかといふへからす

といふまゝにえんにはいのほり給【13ウ】
ぬおきなことはりに思ふ此国に見へ
ぬ玉の枝也此たひはいかてかいなひ
申さん人さまもよき人におはす
なと云ゐたりかくや姫の云やうおや
のの給ゑをひたふるにいなひ申さん
事のいとおしさに取かたき物をかく
あさましくもて来る ゑをねた
く思ひ翁はねやのうちしつらひなと
す翁御子に申やういかなる所にか此
木は候けんあやしくうるはしくめ
てたき物にもと申御子答ての給は
くさおとゝしのきさらきの十日
ころになにはより舟にのりて海の
中にいてゝゆかん方もしらす覚へ
しかと思ふ ゑならて世の中にいき【14オ】
てなにかせんと思ひしかはたゝむな
しき風にまかせてありくいのち
しなはいかゝはせんいきてあらんかき
りかくありきてほうらいといふ
覧山にあふやと海にこきたゝよ
ひありきて我国のうちをはなれて
ありきまかりしにある時は波あれ
つゝ海のそこにも入ぬへく或時には
風に付てしらぬ国にふきよせゝれ
て鬼のやうなるもの出きてころ
さんとしき或時にはきしかたゆく
すゑもしらすうみにまきれんと
しき或時にはかてつきて草のねを
くい物としきある時にはいはんかた
なくむくつけゝなるものきてくい【14ウ】
かゝらんとしきある時にはうみの
貝をとりて命をつく旅のそらに
たすけ給ふへき人もなき所にいろ
〳〵のやまひをして行方空も
覚えす舟のゆくにまかせてうみ
にたゝよひて五百日といふたつの
時はかりにうみの中にはつかにやま
見ゆ舟のうちをなんせめて見る
うみの上にたゝよへる山いとおほ
きにてありその山のさまたかく
うるはしこれやわかもとむる山なら
んと思ひてさすかにおそろし
く覚えて山のめくりをさしめく

らして二三日はかり見ありくに
天人のよそおひしたる女山の中【15オ】
よりいてきて銀のかなまるをも
ちて水をくみありくこれを見て
舟よりおりて此山の名を何と
か申ととふ女答ていはく是はほう
らいの山なりとこたふ是をきく
にうれしき叉かきりなし此女
かくの給ふはたれそととふ我名は
うかんるりといひてふと山の中に
入ぬその山見るにさらにのほるへき
やうなし其山のそはひらをめくれ
は世中になき花の木ともたてり金
しろかねるりいろの水山よりなか
れ出たるそれにはいろ／＼の玉の橋
わたせりそのあたりにてりかゝやく
木ともたてりその中に此とりても【15ウ】
ちてまうて来りしはいとわろか
りしか共の給ひしにたかはましかは
と此花ををりてまうて来るなり
山はかきりなく面白し世にたとふ
へきにあらさりしかと此えたを折
てしかはさらにこゝろもとなくて舟に
のりて追風ふきて四百余日になん
まうてきにし大願力にやなには
よりきのふなん都にまうてきつる
さらにしほにぬれたる衣たにぬき
かへなてなんたちまうてきつると
の給へは翁聞てうちなけきてよめる
　くれ竹の世ゝのたけ取野山にも
　さやはわひしきふしをのみ見し
是を御子聞てこゝらの日ころ【16オ】
思ひわひ侍つる心はけふなんおち
ぬぬるとの給て返し
　わかたもとけふかはけれはわひしさの
　ちくさのかすもわすられぬへし
との給ふかゝるほとに男とも六人つ
らねて庭に出きたり一人のおと
こふはさみに文をはさみて申く
もんつかさのたくみあやへのうちま
ろ申さく玉の木をつくりつかうま
つりしこと五こくをたちて千余日
にちからをつくしたる叉すく
なからす然にろくいまた給はらす

是を給てわろきけこにたまは
せんといひてさゝけたる【16ウ】

図絵6　車持皇子、蓬莱の玉の枝を提出し、鍛冶工匠、禄請求の文書を提出【17オ】

竹取の翁このたくみらか申叉は
なに叉そとかたふきをり御子は
われにもあらぬけしきにてきも
きえゐ給へりこれをかくや姫聞
て此奉る文をとれといひてみれ
は文に申けるやう御子の君千日い
やしきたくみらともろともにおな
し所にかくれ居給てかしこき玉
の枝をつくらせ給てつかさも給
はんとおほせ給ひき是をこの比
あんするに御つかひとおはします
へきかくや姫のえらし給ふへき也
けりと承て此みやより給はらんと
申てたまはるへきなりといふを聞
てかくや姫くるゝまゝに思ひわひ【17ウ】
つる心地わらひさかへておきなをよ
ひとりていふやう誠ほうらいの木
かとこそ思ひつれかくあさましきそ
らことにてありけれははやかへし
給へといへは翁こたふさたかにつくら
せたる物と聞つれはかへさん叉いと
やすしとうなつきをりかくや姫の
心ゆきはてゝありつる哥のかへし
　まことかときゝてみつれはことのはを
　かされる玉のえたにそ有ける
といひて玉のえたもかへしつ
竹とりの翁さはかりかさらひつるかさ
すかにおほえてねふりをり御子は
たつもはしたゐるもはしたにて
ゐ給へり日のくれぬれはすへり出【18オ】
給ひぬかのうれへせしたくみをは
かくや姫よひすへてうれしき人
共なりと云てろくいとおほくと
らせ給ふたくみらいみしくよろ
こひて思ひつるやうにもあるかなと
云て帰る道にてくらもちの御
子ちのなかるゝまてちやうせさ
せ給ふろく得しかひもなくみな

とりすてさせ給てけれはにけ
うせにけりかくて此御子は一しやう
のはちこれに過るはあらし女を
えす成ぬるのみにあらす天下
の人のみ思はん事のはつかしき
支との給てたゝ一所ふかき山へ
入給ひぬみやつかささふらふ人〳〵【18ウ】
みなてをわかちてもとめ奉れとも
御しにもやし給ひけんえ見つけ
奉らす成ぬ御子の御ともにかく
し給はんとて年ころ見え給はさ
りける也これをなん玉さかなるとは
いひはしめける【19オ】

図絵7　車持皇子恥じて、独り深山に入る【19ウ】

左大臣あへのみむらしはたからゆ
たかに家ひろき人にておはしける
そのとし来りけるもろこし舟の
わうけいと云人のもとに文を書
て火ねすみのかはといふなるもの
かひておこせよとてつかうまつる
人の中に心たしかなるをえらひて
小野のふさもりといふ人をつけ
てつかはすもていたりて彼唐
にをるわうけいに金をとらす
わうけい文をひろけて見て
返事かく火ねすみのかわ衣此
国になき物なり音にはきけ
共いまた見ぬ物なり世にある物
ならは此国にもてまうてきなま【20オ】
しいとかたきあきなひ也然共もし
天竺にたまさかにもてわたりなは
もし長者のあたりにとふらひもと
めんになき物ならは使にそへて金
をはかへし奉らんといへり彼もろ
こし舟きけり小野のふさもり
まうてきてまうのほるといふ支を
聞てあゆみとうする馬をもちて
はしらせむかへさせ給ふときに
馬にのりてつくしよりたゝ七日
にまうてきたるふみを見るにい
はく火ねすみのかはきぬからう
して人をいたしてもとて奉る

今の世にもむかしの世にも此かは
はたやすくなき物也けりむかし【20ウ】
かしこき天竺のひしり此国に
もてわたりて侍けるにしの山
寺にありときゝおよひておほ
やけに申てからうしてかひとり
て奉るあたいの金すくなしと
こくし使に申しかはわうけいか
物くはへてかひたりいま金五十両
給はるへし船の帰らんにつけてたひ
をくれもしかね給はぬ物ならは彼
衣のしちかへしたへといへる事
を見てなにおほす今かね少に
こそあなれうれしくしておこせ
たる哉とてもろこしのかたにむ
かひてふしおかみ給ふ此かはきぬ
いれたる箱を見れはくさ／＼の【21オ】
うるはしきるりをいろえてつく
れりかはきぬをこれはこんしやうの
色也けのすゑには金の光しさゝ
やきたり宝と見えうるはしき事
ならふへき物なし火にやけぬ事
よりもけうらなる事かきりなし
うへかくや姫このもしかり給ふにこ
そ有けれとの給ひてあなかし
ことてはこに入給てものゝ枝
につけて御身のけさういといたく
してやりてとまりなんものそとお
ほして哥よみくはへてもちて
いましたりそのうたは
かきりなき思ひにやけぬかは衣
たもとかわきてけふこそはきめ【21ウ】
といへり家の門にもていたりて
立りたけとり出きて取いれてかく
や姫に見すかくや姫の彼衣を見
ていはくうるはしきかはなめりわきて
誠のかはならん共しらす竹取答て
いはくとまれかくまれ先しやうし
入奉らん世中に見えぬかわ衣のさま
なれは是をと思ひ給ひね人ない
たくわひさせ給奉らせ給ひそと
いひてよひすへたてまつれりかく
よひすゑて此たひはかならすあ
はんと女の心にも思ひおり此おきな

はかくや姫のやもめなるをなけか
しけれはよき人にあはせんと
思ひはかれとせちにいなといふ事【22オ】
なれはえしひねはことはりなりかく
や姫翁にいはく此かわきぬは火に
やかんにやけすはこそ誠ならめと
思ひて人のいふ事にもまけめ世に
なき物なれはそれをまことゝうた
かひなく思はんとの給ふ猶これをや
きて心みんと云翁それさもいはれ
たりと云て大臣にかくなん申といふ
大臣こたへて云此かはゝもろこしにも
なかりけるをからうしてもとめ尋
えたるなり何のうたかひあらんさは
申共はややきて見給へといへは
ひの中にうちくへてやかせ給にめら
／＼とやけぬされはこそこと物のかは
なりけりと云大臣これを見給て【22ウ】
かほは草の葉の色にてゐ給へり
かくや姫はあなうれしとよろこひ
てゐたりかのよみ給ひける哥の
返しはこに入てかへす

なこりなくもゆとしりせはかは衣
思ひのほかにをきてみましを
とそ有けるされは帰りいましにけ
り世の人／＼あへの大臣火ねすみの
かわ衣もていましてかくや姫にすみ
給ふとなこゝにやいますなととふ有
人のいはくかわは火にくへてやき
たりしかはめら／＼とやけにしかは
かくや姫あひ給はすといひ（ふ）けれは
是を聞てそとけなき物をは
あえなしといひける【23オ】

図絵8　阿部御主人、火鼠の皮衣を提出【23ウ】

大伴のみゆきの大納言は我家に
ありとある人あつめての給はく龍
のくひに五色の光ある玉あなり
それをとりて奉たらん人にはね
かはん夏をかなえんとの給ふおのこ
共仰の夏をうけ給て申さく仰
の夏はいともたうとしたゝし此
玉たはやすくえとらしをいはん

や龍のくひの玉はいかゝとらんと申
あえり大納言の給ふてんのつかひ
といはんものは命をすてゝもお
のか君の仰ことをはかなへんとこ
そ思ふへけれ此国になき天ちく
もろこしの物にもあらす此国
の海山よ（に）りたつはをりのほる物【24オ】
なりいかに思ひてかなんちらかたき
物と申へきおのこ共申やうさらは
いかゝはせんかたき物なりとも仰
ことにしたかひてもとめにまか
らんと申に大納言みわらひて
なんちらか君の使と名をなかし
つ君のおほせ支をはいかゝはそむ
くへきとの給ひてたつのくひの
玉とりにとて出し立給ふ此人々
の道のかてくひ物に殿の内のきぬ
わたせになとあるかきり取出して
そへてつかはす此人／／共帰まていも
ゐをしてわれはをらん此玉とり
えては家にかへりくなとの給はせ
けりをの／／仰うけ給てまかり【24ウ】

ぬ龍のくひの玉取えすは帰くなとの
給へはいつちも／／足のむきたらんかたへ
いなんすかゝるすき支をし給支とそ
しりあへり給はせたる物各分つゝとる
或はをのか家にこもりゐ或はをのか
ゆかまほしき所へいぬおや君と申共
かくつきなき支を仰給事とこと
ゆかぬ物ゆへ大納言をそしりあひた
りかくや姫すへんにはれいやうには見
にくしとの給てうるはしき屋をつ
くり給てうるしをぬりまきゑし
てかへし給て屋の上には糸をそ
めていろ／／ふかせてうち／／のしつ
らいにはいふへくもあらぬあやをり
物にゑをかきてまことはりたり【25オ】

図絵9　大伴御行、かぐや姫のために室内を豪華に飾る【25ウ】

もとのめともはかくや姫をかならすあ
はんまうけしてひとりあかしくら
し給ふつかはしゝ人はよるひるまち
給ふにとしこゆるまて音もせす心

もとなかりていと忍ひてたゝとねり
二人めしつきとしてやつれ給て難
波の邊におはしましてとひ給ふ事
は大伴の大納言の人や舟にのりて
龍ころしてそかくひの玉をとれる
とや聞ととはするに舟人こたへて云
あやしき叉かなとわらひてさるわ
さする舟もなしと答るにをちな
き叉する舟人にもあるかなえし
らてかくいふとおほしてわか弓の
力はたつあらはふといころしてくひ【26オ】
の玉はとりてんをそくくるやつはら
をまたしとの給て舟にのりて海
ことにありき給ふにいととをくてつく
しの方のうみにこき出給ひぬいかゝ
しけんはやき風ふきて世界くら
かりて舟をふきもてありくいつ
れの方ともしらす舟を海中に
まかり入ぬへくふきまはして波は
ふねにうちかけつゝまき入神は落
かゝるやうにひらめきかゝるに大納言
はまとひてまたかゝるわひしきめ
見すいかならんとするそとの給ふかち
とりこたへて申こゝら舟にのりて
まかりありくにまたかゝるわひし
きめをみすみふね海のそこに【26ウ】
いらすはかみおちかゝりぬへし若
さいはいに神のたすけあらは南海
にふかれおはしぬへしうたてある
ぬしのみもとにつかうまつりて
すゝろなるしにをすへかめると
とかちとりなく大納言是を聞て
の給はく舟にのりてはかちとり
の申叉をこそたかき山とたのめ
なとかくたのもしけなく申そと
あをへとをつきての給ふかち取
こたへて申神ならねはなにわさ
をかつかうまつらん風ふき波は
けしけれ共かみさへいたゝきに
落かゝるやうなるは龍をころさ
んともとめ給候へはあるなりはや【27オ】
てもりうのふかする也はやかみにい
のり給へといふよき叉なりとて
かちとりの御神きこしめせをと

なく心おさなくたつをころさんと
思ひけり今より後はけの一すち
をたにうこかし奉らしとよことを
はなちてたちゐなく／／よは
ひ給ふ事千度はかり申給ふ【27ウ】

図絵10　大伴御行、寿詞（よごと）をはなつ【28オ】

けにやあらんやう／／かみなりやみ
ぬ少ひかりて風は猶はやく吹かち
とりのいはく是はたつのしわさに
こそ有けれ此吹風はよき方の風
なりあしきかたのかせにはあらす
能方におもむきてふくなりといへ
共大納言は是をきゝ入給はす三四
日ふきて吹かへしよせたり濱を
みれははりまのあかしのはまなりけ
り大納言なんかいのはまに吹よせ
られたるにやあらんと思ていき
つきふし給へり舟にあるおのこ共
国につけたれ共国のつかさまうて
とふらふにもえおきあかり給はて
舟そこにふし給へり松原に御【28ウ】
むしろしきておろし奉るその
時にそ南海にあらさりけりと思ひ
てからうしておきあかり給へるを
見れは風いとおもき人にてはら
いとふくれこなたかなたの目には
すもゝを二つけたるやうな（に）り是
を見奉りてそ国のつかさもほう
ゑみたる国に仰給てたこし
つくらせ給てにより／／になはれ
て家に入給ひぬるをいかてかきゝ
けんつかはしゝおのこ共まいりて
申やう龍のくひの玉をえとら
さりしかはなん殿へもえまいらさり
し玉のとりかたかりし事をし
り給へれはなんかんたうあらしとて【29オ】
参つると申大納言おきゐての給
はくなんちらよくもてこす成ぬ
たつはなるかみのるいにこそ有けれ
それか玉をとらんとてそこらの
人／／のかいせられんとしけり
ましてたつをとらへたらましかは

又こともなく我はかいせられなま
しよくとらへす成にけりかくや姫
てふおほぬす人のやつか人をころ
さんとする也けり家のあたりたに
今はとをらしおのこ共もなあり
きそとて家に少残たりける物共
はたつの玉をとらぬもの共にたひつ
これを聞てはなれ給しもとの上
ははらをきりてわらひ給ふ【29ウ】
糸をふかせ作りしやはとひから
すの巣に皆くひもていにけり
世界の人のいひけるは大伴の大
納言は龍のくひの玉やとりて
おはしたるいなさもあらすみま
なこ二にすも丶のやうなるたま
をそへていましたると云けれ
はあなたへかたと云けるよりそ
世にあはぬことをはあなたへかた
とはいひはしめける【30オ】

図絵11　大伴御行、龍の頸の玉を取らずに帰参した家臣に、残る物品を付与【30ウ】

［附記］
一　貴重な資料の閲覧及び掲載を御許可いただいた九州産業大学図書館に、厚く御礼申し上げます。
一　本稿は、同志社大学人文科学研究所第21期研究会第6研究「近世から近代に至る日本伝統文化の分野横断的研究とデータサイエンス教材への活用」（二〇二二～二〇二四年度）における研究成果の一部です。